

『天理教教典』における「道」①

おやさと研究所助教
澤井 治郎 Jiro Sawai

『天理教教典』は、原典に示された親神の救済意志と救済実現の筋道とを体系的に説明した書物である。それは、原典に基づいて編述された組織的説明であるために、その内容を正しく理解しようとするには、常に原典を参照することが求められる。こうした意味で、『天理教教典』は原典への手引書としての役割をもつことにもなるとされる（『改訂天理教事典』284頁参照）。したがって、「おさしづ」における語句「道」を探求するにあたり、その手引きとして『天理教教典』における「道」の用例について概観したい。

「道」が終盤に集中

『天理教教典』の本文における「道」を調べると、その用例は60件ある。その他に「おふでさき」からの「みち」の引用が13件（11首）、「おさしづ」からは1件の引用に2カ所あるが、ここでの目的は『天理教教典』は「道」という言葉をどのように位置づけて用いているかということにあるので、原典からの引用は考察の対象に入れていない。ちなみに、前の号で「道」が「天理教」を指して用いられることに触れたが、「天理教は、ここに始まる」（3頁）と1カ所に出てくるのみである。

「道」の60件の用例を章ごとに示すと次のようになる（カッコ内の数字が件数）。1章（9）、2章（5）、3章（2）、4章（2）、5章（9）、6章（1）、7章（2）、8章（2）、9章（9）、10章（19）。一見して分かるように、1、5、9章が比較的多く、さらに10章では飛びぬけており、終わりの9、10章に約半数が集中している。この「道」の用例が終盤に集中していることには何か意味があるのだろうか。『天理教教典』は裁定文にある通り、「天理教教会本部に於て編述したもの」であり個人の著作ではないが、その草案の段階での担当は、「八、九、十章は諸井慶徳（山名大教会四代会長）」とされている（田中喜久男「各教会史料掛之講話」『史料会報』第68号、10頁）。したがって、同じ諸井氏が担当の8、9、10章の間で「道」の用例数にかなり差があるわけで、その用例の差は全体の構成と各章の内容との関わりにおいて捉えるべきであると考えられる。

前篇と後篇

『天理教教典』はその内容上、前篇と後篇に分かれている。中山正善二代真柱はこれに関して次のように説明している。

前篇は主として教理を書き、後篇は主として我々の信仰の順序を書くということを、その建前としたのであります。（中略）教祖が親神様のお話をお伝えになったそのお話の内容を、主としておふでさきから一つの筋道の立ったものとして、拾いあげてくるというのが前篇の役割であります。そうして後篇は、そのお話によって、聞くところの人たちはいかにして導かれ、いかにして心の入れ替えをなし得るか、即ち心がどうして開けていけるかという道順を、五章に分かって書いたものであります。（中山正善『天理教教典講話』改修版、天理教道友社、1979年、7頁）

まず、前篇は教理、後篇は我々の信仰の順序について書いてあると言われる。したがって、大きく分ければ、「道」という

言葉は、教祖の説かれた教理よりは、私たちの信仰との関連で多く用いられているということになる。ただし、ここに引用した文章では、前篇について「筋道」、後篇については「道順」と、両方を「道」という言葉で説明されている。実際、「道」という言葉は『天理教教典』の第1章以降すべての章に出てくるわけであるから、次にその用例を前篇と後篇に分けて整理したい（ただし、紙幅の関係上今号で扱うのは前篇までである）。

陽気ぐらしへ向かうたすけの道：前篇

まず、前篇の第1章で、「おふでさき」が引用されて「神一条の道を進む者の道すがらを、山坂や、茨の畔などにたとえて、この道は、一時はいかに難渋なものであろうとも、一すじに親神にもたれて通り切るならば、段々、道は開けて、細道となり、遂には、たのもししい往還道に出られる」（8頁）と、道の順序が説かれる。

この前篇に「道」の用例は27件ある。その中で最も多いのは「たすけ一条の道」という言葉で9件ある。例えば「親神は、一れつの人間に、陽気ぐらしをさせたいとの親心から、教祖をやしろとして表に現れ、よろづいさいの真実を明かして、珍しいたすけ一条の道を教えられた」（15頁）など、親神が教祖を通して教えられたことが「たすけ一条の道」と表現されている。また、「つとめとさづけとは、親神が、世界一れつに、陽気ぐらしをさせてやりたい、との切なる親心によつて教えられた、たすけ一条の道である」（23～24頁）と、その中心的な内容は、「つとめとさづけ」であり、特に「つとめ一条」を「よろづたすけの道」（15頁）、「さづけ」を「身上たすけの道」（22頁）と説明されている。このように「たすけの道」という意味で用いられるのが11件である。その内に、「陽気ぐらしへのたすけ一条の道」（13、43頁）など、「たすけの道」が陽気ぐらし実現のための道であることが5件で示され、その他にも「親神は、この真実を明かし、一れつ人間に陽気ぐらしへの道を教えようとて、教祖をやしろとして表に現れられた」（31頁）など「陽気ぐらしへの道」という言葉が2件あり、前篇ではおもに「たすけ」と「陽気ぐらし」が強調されている。

そして、前篇の締めくくりの第5章「ひながた」では「教祖は、口や筆で親神の教を説き明かされると共に、身を以てこれを示された。この道すがらこそ、万人のひながたである」（45頁）と信仰者のとるべき心構えが示唆される。同章では、教祖の立教以前の信心の様子（45頁）や、立教後、家財を貧しい人々へ施された歩み（46頁）を指して「道」が使われたり、「道行く渡御」と文字通り道そのものを指す用例（47頁）などもあるが、前篇の最後の用例では「筆をとつて、たすけづとめのしんである人間宿し込みのぢぼと、かんろだいの理を明かし、つとめの人衆について教え、なお、証拋まもりや、いき・てをどりのさづけを渡すなど、たすけ一条の道を示された」（49～50頁）と種々の具体的な教えが「たすけ一条の道」としてまとめられている。

このように、前篇においては、親神の教えは「陽気ぐらしへ向かうたすけの道」であることが強調され、それが教祖の「ひながた」を通して伝えられたことが説かれている。